

令和六年 五月二十六日

青鳳会講師 吉野 久

精神ストレスを受けた状態を、古典東洋医学の言葉でいうと、「栄養の廻りの悪化した状態」と言える。

栄(Ⅱ)営・・・血液による栄養(營養)

衛・・・皮膚表面における外邪防衛＋免疫作用による内部防衛

咽頭・咽喉はつねに過労状態にある器官である・・・たとえば、PCを使用して文書を作っている時、あるいは文書を黙読している時でも、発声に関わる部位は動いている(ルドルフ・シュタイナーによる指摘)。

これに加えて、常時、外邪にさらされていること、また先の長野先生による「ヒトの生命は疲労レベルにおいてすでに扁桃の病変が認められる」という指摘を考慮に入れると、咽頭・咽喉はきわめて過酷な状態に置かれていると言える。

以下の「靈樞・憂恚無言第六十九」では、咽頭・咽喉の構造と働きを、現代西洋医学とほとんど同じように見ており、興味深い。ただし題目に「憂恚※無言」とあるにもかかわらず、多大な精神ストレスを抱えた場合に、喋ることができなくなってしまう場合の病理については説明がなく、残念である。

※恚 イ いかる、うらむ

■咽頭・咽喉について

靈樞・憂恚無言第六十九

黄帝問於少師曰、人之卒然憂恚而言無音者、

何道之塞、何氣出行、使音不彰、願聞其方。 恚 イ いかる、うらむ

少師答曰、咽喉者水穀之道也、咽イン||むせぶ 喉コウ||喉のなる音

咽・喉ともに、狹隘の要衝の意がある

喉嚨者氣之所以上下者也、嚨 ロウのど

會厭者音聲之戸也※¹、厭^{ええん} エン おす、おさ¹ふ 後文によれば喉頭蓋をさす。

口唇者音聲之扇也、

舌者音聲之機也、機 ひきがね、からくり

懸雍垂者聲之關也、懸雍垂¹ 口蓋帆と口蓋垂 雍¹ つまる、さえぎる

頤頰者分氣之(して)所泄也、頤 カウのどぶえ 頰 サウ ひたひのどへ本資料末を参照

後文を見ると咽頭口部を指していることが分る。 分氣¹ 息が鼻腔と口腔に分岐する※²

横骨者神氣所使主發舌者也。横骨¹ 張介賓 喉の上の軟骨なり¹ 甲状軟骨か

故人之鼻洞涕(鼻水)出不收者頤頰(=鼻腔から咽頭への咽頭口部)不開、

分氣失也。

是故厭(喉頭蓋)小而疾薄則發氣疾(はやい)、其開闔利、其出氣易※³。

其厭大而厚則開闔難、其氣出遲。故重言(言葉が重い)也。

人卒然無音者寒氣客于厭(喉頭蓋)、則厭不能發(さっと動く)。

發不能、下至其開闔不致、故無音。厭¹…發 瞬時に動く

黄帝曰刺之奈何。

歧伯曰足之少陰上、繫於舌、絡於横骨(甲状軟骨)、終於會厭(喉頭蓋)。

兩(ふたつながら)寫其血脈、濁氣乃辟(のぞく)。

會厭(喉頭蓋)之脈上絡任脈、取之天突、其厭乃發也。

※¹ 會厭 張介賓 會厭は喉の間の薄膜なり。周圍は會合し、上は懸雍(口蓋垂)に連なる。

咽喉の食と、息道のもつて亂れざるは、その厭の遮ざるに頼るを得てなり。

↓ 薄膜」とは 食と、息道のもつて亂れざる」という機能を考えると喉頭蓋を指していると思われる。

※2 張介賓 頰の前に竅(あな)あり、息は鼻に通ず。

張志聡 頰類は腭(あご)の上の竅。口鼻の氣、および涕、唾(こ)より相通ず。

《読み下し文》

黄帝、少師に問ふて曰く、人の卒然として憂恚(い)かる、うらむして言ふに無音なるは、何(いづく)の道、塞がりて、何の氣、出で行き、音をして彰らかならざら使む。願はくば其の方を聞かん。

少師、答(て)曰く、咽喉は水穀の道なりて、喉嚨は氣の上下する所以の者な

り。會厭(喉頭蓋)は音聲の戸なりて、口脣は音聲の扇なり。舌は音聲の機なり

て、懸雍垂(口蓋帆と口蓋垂 雍Ⅱつまる、さえぎる)は聲の關なり。頰類(咽頭鼻部)は分氣して泄れる所なりて、横骨(喉の上の軟骨)は神氣の發舌を主ら使むる所の者なり。

故に人の鼻洞より、涕(この場合、鼻水)出でて収らざるは、頰類(Ⅱ鼻腔から咽頭への咽頭鼻部)開かず、分氣、失せる也。

是の故に、厭(喉頭蓋)、小さくして、疾、薄(せま)れば則ち、發氣、疾(はや)く、其の開闔、利なりて、其の氣を出だすこと易し。其の厭、大きくして厚ければ則ち、開闔、難しく、其の氣、出づること遅し。故に言に重きなり(言葉が重い)。人の卒然として音、無きは、寒氣、厭(喉頭蓋)に客すれば則ち、厭、發する能はず。發、不能にして、下、其の開闔を致さざるに至るが故に、音、無きなり。

黄帝曰く、之を刺すは奈何。

歧伯曰く、足の少陰は、上のかた舌に繋がり、横骨(甲状軟骨)に絡ひ、會厭に終る。兩(ふた)つながら(つながら)其の血脈を寫せば、濁氣、乃ち辟(のぞく)かる。會厭の脈は、上のかた任脈を絡ひ、之を天突に取れば、其の厭、乃ち發するなり。

《現代日本語訳》

黄帝が少師に問うて言うには、人が恨みに鬱然となったときに、突如として言葉が出なくなるのは、何の道が塞がり、何の氣が出てしまい、声が彰らかたなくなるのか。願わくばその治療方を聞きたいのだが。

少師が答えて言うには、咽喉は水穀の道であり、喉嚨(のど)は氣の上下するためのものです。

會厭(喉頭蓋)は音声の戸であり、口脣は音声の扇であるといえます。

舌は音声を出すための引き金であり、懸雍垂(口蓋帆と口蓋垂)は声の関門といえます。

頤頰(咽頭鼻部)は、気管から吐き出される呼気が、鼻腔と口腔に分かれる所で、横骨(喉の上の軟骨)は、神氣が舌の動きを主っている場所です。

よつて人の鼻洞より、鼻水が出て止まらなくなるのは、頤頰(頭鼻部)が詰まって開かず、鼻から息を吐くこともできなくなっているのです。

是の故に、厭(喉頭蓋)が小さい人の場合は、病(邪氣)が迫ると、発氣も速く行なわれるので、喉頭蓋の開閉も速くでき、呼気を出すことも容易になります。

其の厭(喉頭蓋)が大きく厚ければ、開閉は難しく、呼気が出ることも遅くなります。したがって、鼻が詰まっているので言葉が重く聞こえるのです。

人の声が急に出なくなるのは、寒氣が厭(喉頭蓋)に客して、厭が動作することができなくなつたからで、

さつと動くことができなくなり、その下では、きちんと開閉ができなくなつてしまつているので、声も出ないのです。

黄帝曰く、これを鍼で治すにはどうすればいいのか。

岐伯が言うには、足の少陰經は、上方では舌に繋がり、横骨(甲状軟骨)に絡い、會厭(喉頭蓋)に終つています。下の裏に見える血脈を両方とも寫血すれば、濁氣は除かれます。會厭の脈は、上方で任脈に絡つているので、天突から鍼をすれば、喉頭蓋も動きを取り戻します。

■中国古典医書では精神ストレスをどのように見ているか

素問・上古天真論篇第一

3-2 今時之人不然也。以酒爲漿、以妄爲常、醉以入房、以欲竭

其精。以耗散其眞、不知持滿、不時御神、務快其心、逆於生樂、

起居無節、故半百而衰也。

今時の人は、然らざる也。酒を以て漿(飲み物)と爲し、妄(みだり)を以て常と爲し、酔ひて以て房に入、欲を以て其の精を竭くす。以て其の眞を耗散し、滿つを持(たも)つを知らず、神を御(たも)つを時(よ)しとせず、其の心を快からしめむと務め、生の樂しみに逆ひ、起居に節、無きが故に、百を半ばにして衰ふる也。

今の世の人は、そうではありません。酒を以て普段の飲み物とし(毎度のように酒を飲み)、妄思・妄動を以て常に成し、酔つたうえで寢室に入り異性と交わる。(酒を水のように飲み、信ずるものが無いので妄りに動きまわり、酔つたうえで寢室に入り好色のかぎりをつくすのです。欲に従つた結果、精は竭きてしまい、眞氣も消耗してし

まいます。満足して、そこで終りにするということを知らず、精神を平静に保つことを良しません。気持ちに快からしめんと務めるばかりで、体をいたわって過ごす楽しみに逆らい、動作や行ないに節度がないために、百歳に至る半ばの五十歳にして、体が衰えてしまします。

以欲竭其精、以耗散其眞、

王注：・樂色曰欲、輕用曰耗、樂色不節則精竭、輕用不止則眞散、是以聖人愛精重施、髓滿骨堅。「老子」曰、弱其志、強其骨。河上公曰、有欲者亡身。「曲禮」曰、欲不可縱。

色に楽しむを欲と曰ひ、軽んじて用ゐるを耗と曰ふ。色に楽しみて節ならざれば則ち、精、竭き、軽んじて用ゐて止まざれば則ち、眞、散ず。是れ以て聖人は精を愛し、重く施せば、髓、満ちて骨、堅し。「老子」(安民第三)に曰く、「其の志を弱め、其の骨を強くす(高みを望む志を弱め、現実を生き抜く力となる筋骨を強くする)」と。河上公(「老子」河上公注)曰く、「欲、有る者は、身を亡ぼす」と。「曲禮」に曰く、欲は縦(ほしいまま)にす可からず、と。

好色であることを「欲」と言い、軽んじて用ゐることを「耗」と言う。好色のまま節制することがなければ、精が竭き、軽んじて用ゐることが止まなければ、眞氣は散ずる。このように考えて聖人は精を愛し、精氣に慎重に扱えば、髓も満ちて骨を堅く保てる。「老子」(安民第三)に曰く、「高みを望む志を弱めて、現実を生き抜く力となる筋骨を強くすることが肝腎だ」と。「老子」に注して河上公の言うには「欲、有る者は、身を亡ぼす」と。「曲禮」には「欲は縦(ほしいまま)にす可からず」とある。

3-3b 虚邪賊風、避之有時、恬憒虚无※、真氣從之、精神内守、

病安從※來。是以志閑而少欲、心安而不懼形勞而不倦。氣從以

順、各從其欲、皆得所願。故美其食、任其服、樂其俗、高下不

相慕、其民故曰朴。

※恬憒 心静かで無欲なさま

虚无 虚無 何もなく、からっぽであるさま

※從 (副詞)よりりて もとより、当然のこととして

虚邪、賊風は、之を避けるに時、有り、恬憒虚无にして、真氣、從ふ、精神、内に守

れば、病、安んぞ從つて來らむ。是れ以て志、閑かに、欲を少なくすれば、心、安ん

じて、形、^{からだ}勞するを懼れず、倦むことなし。氣、^よ從つて(もとより)以て順ひ、各々

其の欲を從へ、皆な所願を得。故に其の食を美しとし、其の服を任にし、其の俗

に樂しめば、高下、相ひ慕はず、其の民、故に朴と曰ふ。

※恬憒 恬憒は心静かで無欲なさま

虚无……虚無 何もなく、からっぽであるさま

いわく、虚邪、賊風を避けるには、相応の時というものがある。恬憒虚无であるなら、真氣もその人に従い、精氣と神が内に守られれば、病は、もとより来たるはずもない。

恬憒虚无であることに加えて、志が閑かで、欲が少なければ、心は安んじており、身体にも倦み疲れる心配がない。気持ちも当然のこととして己に順ったものになり、欲も己に従ったものになり、人は皆な、自分の願う所を得る。したがって毎日食べているものに満足し、自分の着ている服を良しとし、暮らして楽しみ、身分の高い者、低い者が互いに懂れることがなければ、国の民はおのずと素朴と言えます。

王冰による「老子」からの引用

「老子」曰、持而盈之、不如其已。言愛精保神、如持盈滿之器、不慎而動、則傾竭天真。

「老子」(運夷第九)に曰く、「持して盈たすは、其の已むに如かず」と。

「老子」運夷第九には、「いっばいに入った水をこぼすまいと心配する前に、入れるのを止めた方がよい」とある。

「老子」曰、知足不辱、知止不殆、可以長久。

「老子」に曰く「足るを知らば辱められず、止めるを知らば殆うからず、以て長久す可し」(老子・立戒第四十四)と。

「老子」には「足りていると思えば恥をかかず、止まることを知っていれば危険はない、それで長久することができる」(老子・立戒第四十四)とある。

「老子」曰、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足常足矣。

「老子」に曰く「禍(わざはひ)は足るを知らざるより大なるは莫く、咎(とがめ)は得むと欲するより大なるは莫し。故に足るを知つて足れば、常に足る」(老子・儉欲第四十六)と。

「老子」には「禍(わざわい)は、満足を知らないことより大なるはなく、咎(とが)めは欲しいと思うより大なるは無い。だから満足することを知らば、常にそれ以上を求めなくとも済む」(老子・儉欲第四十六)とある。

「老子」曰、不見可欲、使(民)心不亂。又曰、聖人爲腹、不爲目。

「老子」曰、「欲す可きを見(しめ)さざれば、(民)心をして亂れざらしむ」(老子・安民第三)と。

又曰く「聖人は腹の爲(ため)にして、目の爲にせず」(老子・儉欲第十二)と。

「老子」には「欲しがるようなものを見せなければ、民の平常心を乱さなくてすむ」(老子・安民第三)とある。また「聖人は質実な生活のために力を注ぎ、華美なもののために力を使わない」(老子・儉欲第十二)とも説いている。

この一条は、目下のウクライナ・ロシア戦争の発端当時「ロシアにとって、この戦争は現在(テレビ)の中の戦争だが、間もなく(冷蔵庫)の中の戦争になるだろう」と発言していた、スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ(ジャーナリスト、ノーベル文学賞作家)の指摘を思い出させる。なかなかそうならないのが歯痒いが。

● 咽頭・咽喉痛、頭痛の経脈的病理については、靈樞・経脈第十」に述べられている。

靈樞・経脈第十

大腸手陽明之脈起于大指次指之端・・・是動則病齒痛頸腫・・・、是主

津液※。所生病者、目黄口乾𦘔衄喉痺肩前臄痛・・・。

腎足少陰之脈起于小指之下邪走足心出于然谷之下・・・所生病者口熱舌

乾咽腫上氣噎乾及痛・・・

小腸手太陽之脈起于小指之端循手外側上腕・・・是動則病噎痛頷腫不可

以顧・・・、所生病者耳聾目黄頰腫頸頷肩臄肘臂外後廉痛、

大腸(経)は手の陽明の脈なりて、大指の次指の端より起る・・・是れ動ずるときは則ち、病んで、齒、痛み、頸、腫れ・・・、是れ津液を主ど

る※。生ずる所の病は、目、黄ばみ、口、乾き、

𦘔衄(鼻血が出る)し、喉痺し、肩の前、臄(上腕)、痛み・・・。

腎は足の少陰の脈なりて、小指の下より起り、邪めに足心を走り、然谷の下に出づる、・・・生ずる所の病は、口、熱し、舌、乾き、咽、腫れ、上氣して噎、乾きて痛むに及ぶ・・・

小腸は手の太陽の脈なりて、小指の端に起り、手の外側を循つて腕に上り・・・是れ動ずるときは則ち、病んで噎、痛み、頷、腫れ、以て顧み

る可からず・・・、生ずる所の病は、耳、聾し、目、黄ばみ、頬、腫れて、頸、頷、肩、臑（上腕）、肘、臂（前腕）の外後廉、痛む。

※ 大腸経は「津液を主る」としているが、これが免疫に関与していることを表しており、手三里穴の取穴につながるのではないだろうか。

■ 頭痛について

靈樞・經脈篇第十

膀胱足太陽之脈、起于目内眥・・・是動則病、衝頭痛目似脫項如拔・・・所生病者痔瘡狂癲疾頭顛項痛。

膽足少陽之脈起于目銳眥上抵頭角下耳後循頸行手少陽之前・・・所生病者頭痛頷痛目銳眥痛缺盆中腫痛。

膀胱は足の太陽の脈なりて、目の内眥より起る・・・是れ動ずるときは則ち病んで、頭に衝き痛み、目は脱するに似て、項も抜けるが如し、・・・生ずる所の病は、痔、

瘡※（おこり）、狂、癲疾※し、頭顛※、項、痛む。

※瘡 ギヤク 毎日一定の時刻に発熱する病氣、おこり、マラリア

※癲 テン 精神病、痙攣を発作的に起こす病氣、癲癩

※顛 シン 頭頂部の頭蓋骨の縫合部

膽は足の少陽の脈なりて、目の銳眥に起る。上つて頭角に抵れ、耳の後を下つて頸を循り、手の少陽の前を行る。生ずる所の病は、頭、痛み、頷（したあご）、痛み、目の銳眥、痛み、缺盆の中、腫れ痛む。

■ 治療

扁桃の診察法

1. 六部定位脈診では肺虚を呈している場合が多い。
2. 天牖穴に圧痛が現れる場合が多いが、この痛みは腎俞に鍼をすることで減弱する。
3. また、後頸部の高位C5の両側筋深部に、「こりこりした細筋が現れ、圧すると痛む。」この箇所は、奇穴「百勞」に相当する。

頭痛の治療

長野式で掲げられる七穴をすべて取穴する必要はない。
腹証を調べ、身体のアンバランスを調べたうえで、後頸部の高位C5の「こりこりした細筋に刺鍼したうえ、施灸する。」

週二回の治療を四週間行なう。

その後は予後観察の目的で、週一回の治療を二週間行なう。

【字統】 類字解…「類」が喉の意を有する証左として掲げる

【字統】

類 ソウ ひたい 声符は桑 ソウ。説文に「頤なり」とあり、頤カクは頤。方言「中夏では頤、東齊では類」とする。ひたいと桑にどのような関係があるものかは不明。

【大漢和】

- ① 頤 ② 頭、頂
- ③ 頤…河目隆頤 孔子家語「困誓」
- ④ おじぎをする

用例「頤子ソウシ 北方人の語でのどを言う。」として、のどに関する用例もある。

世人、竹木、牙骨の類を以って叫子を爲る。人の喉中に置けば、能く人をして言わしむ。これを頤叫子と謂う」として、ある訴訟で訴えられた瘡の者のために頤叫子を作ってやった者があり、その結果、粗々ではあったが一、二の言うことは判別でき、冤を免れた話を夢溪筆談・権智」から引いている。

夢溪筆談(ぼうけいひつだん)は北宋・沈括(しんかつ1030～99)による随筆集。

桑は古代では大木としてあったようで、低木として知られるようになったのは養蚕のため、人為的に用いられるようになってから。養蚕自体は、殷代から行われていた。古くから桑林は歌垣の場であり、晋公重耳が齊に亡命している時、齊からの脱出計画

を、桑の葉摘みの女が盗み聞きしていたのも桑の木の从上からであるが、これはこの女の重耳に寄せる思いの暗喩であろう。この桑の葉摘みの女は、重耳が斉にきてから娶った妻の侍女であり、この後、侍女は主である重耳の妻に殺されへ表向きは、侍女が重耳の斉脱出を知ったからだが、暗喩としては、重耳の妻が侍女の重耳に寄せる思いを断つためである。妻によって重耳は酔っている間に斉を出されるへ表向きは、重耳が自らの咎なく斉を去るためだが、暗喩としては未詳のである。

桑に関する語に「滄桑」の語がある 太平広記 七 神仙伝」。桑田が三度海になりかわる話であるが、桑と滄(大海原)とは、音とともに通底するものがあつたのではないか。額、頬、喉はともに首上にあつて広々した部分であり、字はひろびろとしたイメージに関連していると思われる。